

[様式 1 1]

(対象事業：地域の中核館として他館や他機関と連携して行なう事業)

事業名：郷土しまねの民具 100 選製作事業

事業者名：しまねミュージアム協議会

連携事業館名：しまねミュージアム協議会加盟館
77 館

住所：松江市大庭町 4 5 6 島根県立八雲立つ風土
記の丘内

TEL：0852-23-2485

FAX：0852-23-2429

HPアドレス：

外観写真

①施設概要＝実行委員会概要

島根県内の美術館、資料館、博物館等計 78 館(非展示施設 1 を含む)からなる、しまねミュージアム協議会があり、この協議会が今回の実行委員会の母体となった。特に、今回は民俗資料を中心としたが、保管中の資料や各館の関係者からも情報提供等と呼ばけることにした。

②事業の意図目的

民俗資料は加盟各館に多く収集保管されているものの、十分に活用されている状況とは言いがたい。また、民具の名称、使用方法なども忘れられたり、記録に留められている現状であるので、民具資料をカード化して活用の便を図り、HP 荷も掲載して民具についての関心と興味を深めようとする企画である。

③事業概要

数多くある民具資料を、衣・食・住・山仕事等いくつかの分野に分け、それぞれの典型的な民具をピックアップした。それらの資料についての紹介文を、保管展示中の加盟館の職員、及び製作検討委員等に執筆依頼をし、同時に写真撮影を行ないます。

民具資料については、それらの民具が使用されている様子の写真をできるだけ掲載するようにしたが、農作業風景等の写真そのものが少なかった。また、イラストも考えられたが、経費、時間を考えると無理であった。

民具についての基礎的なデータ、写真を揃えてカードに記述し、できたカードで小中学校に出前授業や講演会をおこなった。民具の歴史、使用方法など小中学生問わず、大変な興味を示してくれたが、1 時間から 2 時間の授業枠では、民具と絡めて当時の生活を理解してもらうことは、相当の困難であるようであった。カードそのものにも関心を示してくれたので、総合学習向けの格好の教材になると思われる。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他 (資料カード)

作成した報告書等

ビデオ ()

冊子 ()

その他 (HP 作成：<http://www.v-museum.pref.shimane.jp/>)

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 約 150 人

内 訳：加盟館 77 館、製作検討委員 4 名、小学校 2 校、中学校 1 校

(1) 事業の実施状況について

1) 資料の選択

数多ある民具の中から100点を選択するのは、無茶である。しかし、島根県内を出雲・石見・隠岐の3地域に分け、その地域性を考慮し、ポイントとなる民具を選択するようにした。資料全体の選択方針としては、衣・食・住の基本的な分類、県下全体の特色としての山仕事、養蚕、紙漉等の産業に関連する項目を考慮してピックアップした。

また、他の館にはみられない独特な資料がある場合は、一館一点で考えた。

名称は異なるが、同じような資料があることから、保存状況が良く、一括資料がある施設のものを重点的にカードに掲載し、その類いの資料を所有するかどうかを、加盟館にアンケートし、所有する資料館名をカードに記載することにした。

2) 制作検討委員会

制作検討委員会は、事務局のほかに、島根県内の民俗学研究者、民具資料を展示している加盟館の代表者、学校教育関係者から人選して構成し、年間4回の委員会を実施した。検討委員は、県内の民具資料に関する情報提供や収集など、今回の制作事業全体への目配りもお願いした。

3) 写真撮影

民具の写真は、これまで専門的に撮影されることが少なく、メモ写真程度のものが多いことが事前調査で明らかであったので、カード掲載資料については、できあがりトーンを揃えるためにも、専門家による撮影を行なうこととした。

撮影前に、加盟館に所蔵品の有無、撮影可能場所の有無、その他撮影条件についてのアンケートを行ない、撮影準備をおこなった。撮影時には、民具など文化財の担当職員、あるいは専門職員がいない場合には、資料収集などの実際を行なわれた方に立ち会っていただいた。この立会いをされた人に、原稿執筆をお願いすることもおきた。

4) 原稿執筆

県内の民具資料は、優れたコレクションとして国の重要文化財に指定されたりしているものがあるが、当時の収集者がお亡くなりになっている例もある。また、歴史民

俗資料館の担当者もかつてはいたものの現在は配置転換になったり、公民館等に管理委託されて、資料の内容、性格について不明者が多くなっている。したがって、カード原稿は、民俗学会所属の人や、地元の研究者に委託することにした。

5) カードの制作

カードのレイアウトは、民具資料を掲載するだけでは、伝える情報が限られるので、名称のほかに、いくつかのデータを掲載するようにした。また、カード表面の資料から、その資料が何かを考える際のヒントとして、問いをかけ、背景に民具に関するイメージ写真を貼付けたりするという工夫をした。

民具の使用中の写真をできるだけ掲載したかったが、農作業中の光景を写真撮影するのは極めて稀なことであり、ほとんどなかった。また、イラストを考えたが、100点総てにイラストを書き起こすことは、無理であり、経費的にも負担できない範囲であった。しかし、写真が無理ならイラストで記録を残しておくことは、民具の今置かれている状況を考えると、実施しておかなくてはならないと考える。

6) ホームページの作成

資料カードに掲載した民具資料は、しまねミュージアム協議会のホームページに搭載して公開している。

<http://www.v-museum.pref.shimane.jp>

(2) 連携等について

1) 加盟館

しまねミュージアム協議会加盟館は、美術館はじめ自然系博物館もあれば、歴史民俗資料館があり、単一傾向の美術館、博物館の協議会ではない。したがって、美術館などには、民俗資料はないものの、寄託品等に関連する資料があるかないか等の調査についての協力を得ることができた。また、自然系の施設でも地元の人が立ち寄った際に、民俗資料カードを置いて関心の度合を高めるこの事業に協力を得られた。

また、民具資料を所蔵する館からは、積極的に資料に関する情報が寄せられたが、100点(選択)という制約で十分にその熱意に応えることができなかった。

2) 制作検討委員

原稿執筆でもふれたように、最近は民俗学担当者を博物館、資料館に配置することは少なくなっており、資料の記述が可能かどうか心配された。しかし、山陰民俗学会の会員や民具研究会のメンバーに協力を得られたので資料の記述は可能であった。

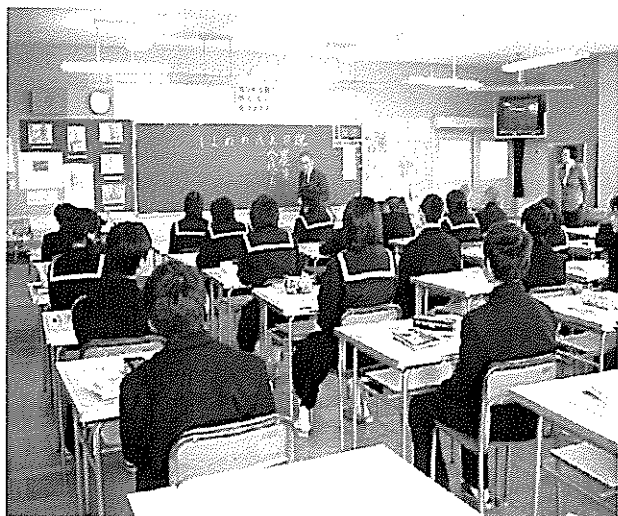
しかしながら、民具の使用法の写真、つまり農作業や漁業中の写真はなかなか記録としてあるものではなく、掲載をあきらめた。民俗学研究者だけではなく、地域の生活史の記録として、幅広く生業記録を集めておく必要が痛感された。また、分かる範囲で、イラストなどで民具の使用風景などを書き記しておく必要もあると考えられた。

3) 小・中学校

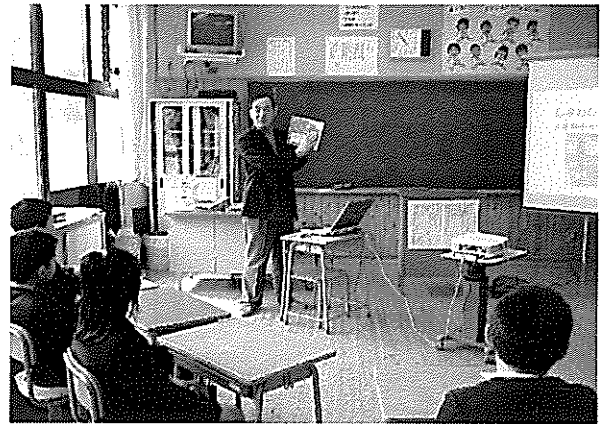
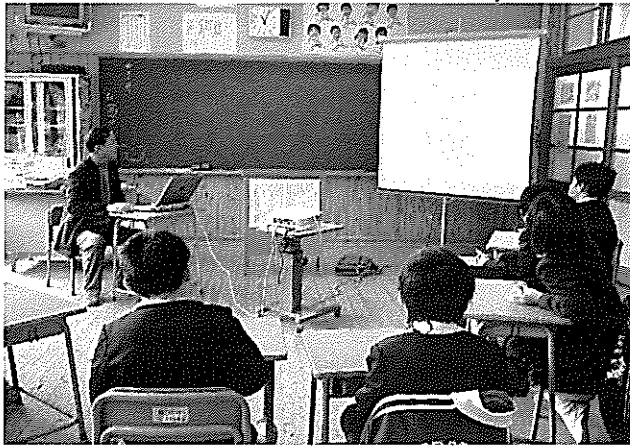
成果物である資料カードを利用した出前授業あるいは講演会については、総合学習の時間を利用した授業でよければと、協力を得ることができた。

斐川東中学の場合は、中学生ということでシャイな面が出て、活発な発言はなかったが、食事時の銘々の食器について、質問があった際には、驚きの声があがった。

つまり、茶碗や箸は未だに個人の使用物として明確に別れているが、取り皿や汁碗は誰の皿であるかという認識が薄れていることが明らかになった。これは、かつて箱膳では、個人の食器は個人の箱の中に収納するという食習慣の一部が受け継がれていることの証しであり、取り皿に少しずつ取り分けることで偏食や残さない習慣を身につけるのに有効な方法であることが説明されるに及んで、かつての躰の厳しい生活の一端を理解できたようであった。



斐川東中学校での出前授業風景(浅沼 博氏による)



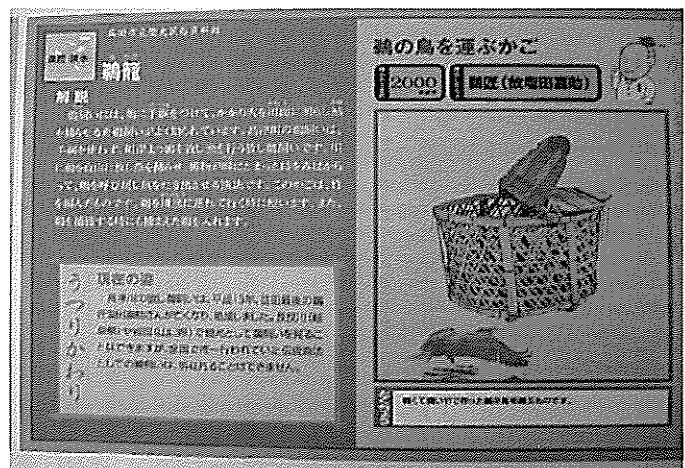
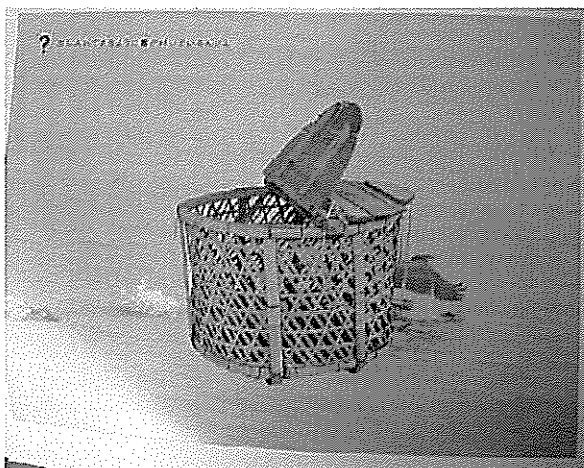
金城町波佐小学校での出前授業風景(隅田正三氏による)

(3) 成果物の内容

成果物は、表裏に民具資料を掲載したA4版カード資料である。

表面は、民具1点を紹介し、この民具の用途、機能などを問いかける。

裏面は、その問いの回答、名称、その民具が現在どのような器具となっているのか、そういった情報が盛り込まれている。



民具カード表面(資料についての問いかけ)民具カード裏面(解答、用途他説明)

このカードの目的は、このカードを利用して、授業などにも活用してもらうことで、このカードそのものが最終目的ではない。

このカードの情報から、さらに分野を広げ、地域を広げて民具について興味を深め、

この民具が使用されていた当時の生活様式、生活思考等にも関心をもってもらうことである。

しかし、小学校で使用するとした場合、若い教師の人がどれだけこれらの民具を知っているかという問題がある。50代のこの事業のメンバーでも、見たことも使用したこともない民具が多くある。果たして、教師に説明ができるのだろうか？書かれた説明文書を読んでも、民具によっては、さらなる説明を求めたく資料もあるだろう。

民具の裏にある当時の生活をそのまま復活させるというのではないが、例えば最近流行の「もったいない」という言葉が具現化された一つがこれらの民具であると、気がついて欲しいものである。

反省点としては、民具使用中の写真が少ないこと、それを補うイラストなどの多用の必要性、民具がどのように変遷したかを示す現在の姿の資料が充分でなかったことがあげられる。

（４）参加者の反応

出前授業を受けた小学生・中学生には、好評であった。つまり、資料館等で見かけてはいても、その製作方法や用途がわからないために、民具などについての興味がわからなかったらしい。それが、カードで類例を明示しながら、そして口頭で説明をしてもらいながらの説明で、よくわかったというアンケートがある。写真を見ながらや説明を受けることで興味を深める人が多いことは、民具に限らずいえることであるが、特に民具は最近の子ども達にとってはなじみの薄い物だけに、知識が増えたことは喜んでもらった。

中学生の場合は、民具の背景にある庶民生活、その生活の中で守られてきた生活上でのルール、あるいは躰といった内容に話が及んでも理解してもらえたようである。

職場でこの作業を見ていた50代の職員は、非常に懐かしがりそこから昔話が展開したが、小中学生に限らず大人とこどもの会話を紡ぎ出す小道具としても、この資料カードは有効であると考えられた。

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

島根県の場合には、これまで2ケ年にわたってこの事業で、マップやガイドブックを

作成している。マップで県下全体の博物館施設等の概要を紹介し、翌年度のガイドブックでは、展示品と施設を上手く連携付けてのガイドブックができたと好評であった。

その継続事業として、展示資料の中で重要ではあるが等閑視されている民俗資料をクルーズアップして資料カードを制作できたことは、民具資料の価値を再認識してもらううえでこの上ない事業であった。

このカードの利用方法としては、学校の授業でも実物資料の代替えとしても使え、さらには博物館や歴史民俗資料館に、このカードを持参しての授業や見学会もできるというメリットがある。

授業に持ち込めない民具はカードが代役を果たし、またカードをゲーム感覚で使って生業について考えさせることもできる。このカードは、県下の小中学校、ミュージアム協議会加盟館など多くの施設に配布したので、総合学習などで多くの学校が共同で、民俗資料について、あるいは忘れられたかつての日本の庶民生活について考え直す手引きになると思われる。

また、カード制作にあたって、100点以上の民具が専門写真家によって写真撮影されたことは、民具資料を多いにPRするのも有効で、事業によるお蔭である。